



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	2016年度 学会巡検報告 多摩田園都市に見る都市郊外の風景：横浜市青葉区美しが丘界限（学会記事）(fulltext)
Author(s)	内藤,亮
Citation	学芸地理(73): 54-55
Issue Date	2017-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2309/149294
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

2016年度 学会巡検報告

多摩田園都市に見る都市郊外の風景 —横浜市青葉区美しが丘界限—

実施日：2016年10月30日（日）

案内者：大矢幸久先生（学習院初等科教諭，学部53期・院39期）

コース：東急田園都市線たまプラーザ駅 — 東急百貨店と駅前商店街 — たまプラーザ団地
美しが丘3丁目 — 保木の丘 — 保木薬師堂 — 横浜市と川崎市の市境 — 菅生緑地
美しの森公園 — 美しが丘公園 — たまプラーザ駅

2016年度の学会巡検は、2016年10月30日（土）に横浜市たまプラーザ駅周辺で行われ、卒業生や学生計12名が参加した。大矢幸久先生の案内のもと、郊外田園都市として開発されてきた横浜市青葉区美しが丘とその周辺地域について、住宅地の環境の維持・発展・変容について考察した。

横浜市青葉区美しが丘およびその周辺地域は、東急電鉄が主体となって田園都市線の延伸とともに開発された多摩田園都市の中心的な住宅地である。東急と地元住民とで事業着工前に、保留地を東急が譲りうける約束をし、その見返りとして事業費全額を東急が負担し、工事の設計・管理等を一括して代行する「一括代行方式」とよばれる、東急主導の土地区画整理手法が実施された地域である。

本巡検は、東急多摩田園都市の中心と位置付けられている、東急田園都市線のたまプラーザ駅から開始した。スペイン語の広場を意味する Plaza を由来とし、駅だけでなくショッピングセンターや公共施設、住宅が合わさった場所として開発された。近年では、駅の再開発により駅直結マンションの建設・商業施設の拡大により、乗降客数が増加している。

次に、たまプラーザ駅周辺の住宅景観を概観



写真1 再開発されたたまプラーザ駅

した。東急所有地と地元地主所有地の混在により、開発された住宅と既存の商店街との異質な組み合わせを見ることができた。東急により開発されたたまプラーザ団地は、田園都市線が延伸されて間もない1968年に竣工したため、現在では建物や設備の老朽化、および居住者の高齢化が生じている。そのため、横浜市と東急が一体となって、部屋のリノベーションや団地内のバリアフリー化など、団地の再生に取り組んでいる。

たまプラーザ団地から歩行者専用道を進み、美しが丘界限へと入る。美しが丘界限は、車道歩道が分離された街路網が形成されている。そのため、たまプラーザ駅から自動車に遭遇することなく行き来ができる。また、車道に関して

も、曲線上道路やロータリーを多用するクルドサック手法が採用されているのが特徴である。住宅面ばかりに目が向けられがちだが、この美しが丘には、多摩丘陵の様子が色濃く残っているところも存在する。元石川町周辺には、里山が保存されており、農業専用地区として切り花や野菜が栽培されている。また、美しが丘地区の中央には谷戸が東西に走り、雑木林や水田が広がる。



写真2 里山保存地区から眺める住宅

次に、美しが丘の北西に位置する、美しが丘西地区を巡った。近年に開発された地域であり、小学校も4年前に開設された地域である。

その後は隣接する川崎市宮前区を巡り、美しが丘住民によって開設が反対された川崎市北部市場およびその景観を見えないように保全されている菅生緑地を観察した。川崎市側においても美しが丘という名称を用いるマンションが近年建設されている。

再びたまプラーザ駅周辺に戻り、社宅街から民間分譲マンションに再開発された美しが丘2丁目を巡り、たまプラーザ駅にて解散した。

今年度の学会巡検では、東急による住宅開発の具現化の様子、および郊外住宅地の変容と今後の展望について考察できた巡検であった。この場を借りて、今回の巡検を企画してくださった大矢幸久先生に感謝の意を表したい。

(院50期 内藤 亮)



写真3 まプラーザ周辺地域において巡検中の様子 案内者の大矢幸久先生（右から3人目）